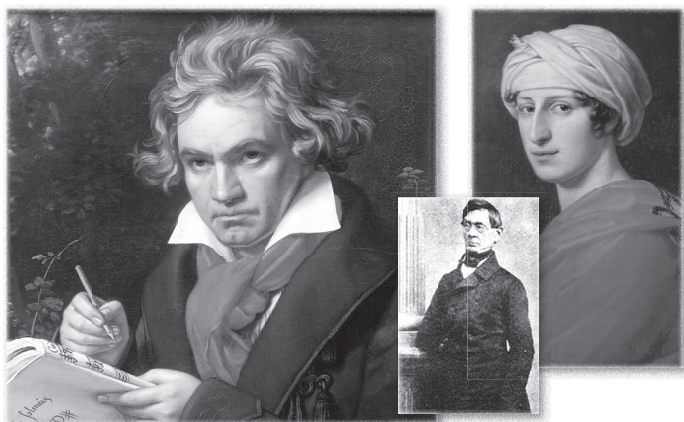


楽聖ベートーヴェン「九つの謎」

平野 昭



左から、ベートーヴェン、アントン・シンドラー、アントーニエ・ブレンターノ

〈第九〉にちなんで、ベートーヴェンに関する九つの素朴な疑問をとおして、その人間像に迫ってみよう。

Q1. ベートーヴェンはモーツァルトに会えたのだろうか？

ベートーヴェン（1770～1827）の伝記には、16歳の1787年4月にウィーンのモーツァルト（1756～91）の前で、与えられた主題でピアノの即興演奏をして驚かせ、「彼を見守りたまえ、いつか世間の話題となるだろう」と言わしめた、と伝えられている。しかし、モーツァルト側の伝記でこの話はほとんど扱われていない。当時モーツァルトは依頼のあった新作オペラ〈ドン・ジョヴァンニ〉の作曲に取り組んでいた。3月下旬に、ザルツブルクの父親が病に倒れたという報せが届き、4月4日付で父の快復を祈る見舞いの手紙を書いている。ベートーヴェンがモーツァルトを訪問したとすれば、まさにこの時期なのである。この年の『ミュンヘン新聞』掲載の旅行者往来記事によれば、「4月1日」の欄に「ケルン近郊ボンの楽士ベートーヴェン氏逗留」とあり、「4月25日」の欄にも「ケルン選帝侯楽士ベートーヴェン氏、黒鷲館に宿泊」とある。この記事だけがベートーヴェンのウィーン訪問の往路・帰路と推定する傍証であって、行く先がウィーンか否かの決定的証拠にはならない。

また弟子のチェルニー（1791～1857）が、ベートーヴェンはモーツァルトの演奏を聴いて「見事な演奏であったが、細かく切り刻

むようなもので、レガートではなかった」と語っているのに対し、『伝記的覚書』を著した弟子のリース（1784～1838）は、ベートーヴェンが残念がっていたのは「けっして自分の前では演奏しなかった」ことだ、と伝えている。ベートーヴェンがウィーンに進出するのはモーツァルト他界のほぼ1年後であり、両者が会ったとすれば1787年のこの機会以外にはないのだ。

Q2. 難聴になったのはいつ頃から？ 聞こえなくて、作曲はどのようにしたのか？

難聴の原因は多くの研究者によって探究されてきたが、はっきりしたことは不明。一部で言われたワインの劣化を抑えるための鉛や、大好物の川魚に残留していたヒ素による中毒が原因であるなら、ベートーヴェンの周囲に聴覚障害の人が大勢いたことになるが、そうした事実はない。恐らく幼少期の高熱を伴う病気が遠因、と考えられている。

さて、難聴になってからの作曲だが、30歳頃までは誰よりも優れた聴覚と音感をもっていたベートーヴェンであれば、楽譜を見れば頭の中でその響きを聴くことができ、作曲にピアノなどを使う必要はない。里山や小川のほとりを散歩しながらポケット・スケッチ帳（五線紙）に楽想を書きつけ、家の中ではデスク・スケッチ帳で曲想を練り、発展させていたのである。

Q3. 『ハイリゲンシュタットの遺書』って本当に「遺書」なの？

数年間にわたって人にも言えず苦悩してきた難聴の病を「遺書」で語りつくすことによって、心理学という精神的浄化（カタルシス）となり、難聴の病を受け入れて創造活動を前進させようとした「生の宣言」と解釈される。

Q4. ピアノ・ソナタ〈月光〉とか〈ヴァルトシュタイン〉は誰が付けた曲名？

これらの愛称はベートーヴェンの作曲構想とは全く無関係の後世が作った「こじつけ」や、作品を献呈した人物の名前であり、音楽内容とは関係ない。〈月光〉はそもそもベートーヴェンがつけた名は〈幻想曲風ソナタ〉。1801年に作曲されたこの曲を詩人レルシュタープ（1799～1860）が2歳の時に知るはずがない。1825年にレルシュタープはウィーンを訪れベートーヴェンに会っているが、この曲の第1楽章について「スイスのルツェルン湖の月夜に浮かぶ小舟がさざ波で揺れるよう」と語ったのは、ベートーヴェンが他界して5年もたつ1832年のことであった。

Q5. 交響曲第5番「ハ短調」で「運命はどのように扉を叩いてやってくる？」

1840年に最初の本格的な伝記『ベートーヴェン伝』を出版したアントン・シンドラー（1795～1864）とベートーヴェンが初めて出会ったのは、1814年の3月、シ

ンドラーが18歳でウィーン大学の学生の時だった。アマチュアのヴァイオリン奏者のシンドラーがファンだったベートーヴェンに話しかけただけである。大学卒業後、シンドラーはヨハン・バプティスト・バッハ（1779～1847）の弁護士事務所に助手として就職した。この頃、ベートーヴェンは弟の遺児である甥カールの後見権をめぐって弟の妻と裁判係争中にあり、1819年からJ.B.バッハと顧問弁護士契約を結び、その助手シンドラーとの交流も必然的に増していた。さらに交流が急増するのは、シンドラーがヨーゼフシュタット劇場オーケストラのコンサートマスターに就任した1822年暮れ以降のことで、秘書的な仕事をしたのはせいぜい1825年頃まで。自分の編纂した『伝記』の内容と齟齬を来すような事実が記載されたベートーヴェン晩年の『会話帳（筆談帳）』の多くを破棄し、内容を粉飾改竄したシンドラーの伝えることは信憑性が低い。その筆頭が、〈運命〉という愛称と「扉のノック音」のエピソードだ。「運命はこのように扉を叩いてやってくる」と、本当にベートーヴェンが語ったのだろうか？

Q6. 「不滅の恋人」って誰だったの？

「不滅の恋人」とは、1812年7月6日の朝と夕方、7日の朝に立て続けに書かれた3通のラヴ・レターでの呼びかけに由来している。1通目では「わが天使よ、私のすべてよ」で、2通目では「最愛のひとよ」で、3通目で「不滅の恋人よ Unsterbliche Geliebte」となっている。実名の伏せられたこの手紙が誰に宛てて書かれたのかという、1世紀以上にわたる研究の結果、その相手はフランクフルトの銀行家ブレンターノ（1765～1844）の妻アントーニエ（1780～1869、旧姓ビルケンシュトック）だというのが定説になっている。しかし、異論を唱える研究者は、1804年から09年までの間に書かれた「13通の恋文」（1962年に新発見）の相手であるダイム伯爵（1752～1804）未亡人ヨゼフィーネ（1779～1821、旧姓ブルンスヴィク）こそ第一の候補と主張している。「13通の恋文」は、夫を失い未亡人となってからのヨゼフィーネに宛てたものだ。また、人妻や未亡人ではなく、真剣に結婚を考えた女性もいた。親友グライヒェンシュタイン男爵（1778～1828）が1811年に結婚する相手アンナ・マルファッティ（1792・12月～1869）の姉テレゼ・マルファッティ（1792・1月～1869）への片思いである。テレゼは1816年に高級官僚のヨハン・ドロスディックと結婚している。ベートーヴェンは自分の意にかなう知的で教養ある女性に出会うと、既婚者でも貴族階級の女性であっても直ぐに恋愛感情を抱き、一時的にせよ、真剣に愛することで自らの心を満たしていた。結果的に

失恋続きでも、生涯だれかしらを楽しんでいたのだろう。

Q7. 〈第九〉の歌詞からシラーの詩は見えてこない？

1824年の〈第九〉初演以前に、シラーの頌詩『歓喜に寄す』は、少なくとも40人以上の作曲家によって歌曲や合唱曲の歌詞として使われていた。この詩が1786年に創作された時には、1節12行（8行のヴァースと4行のコーラス）全9節108行からなっていた。その後、1803年に全8節96行の頌詩（オード）に改訂された。しかし、ベートーヴェンが〈第九〉で使ったのはわずか36行で、しかも第1節から第4節までのヴァースとコーラスを自由に組み替えているので、この頌詩がフリーメーソンの集会とか結婚披露宴パーティーでの「酒盛り歌」という当初の性格は全く影を潜め、「人類愛」「世界平和」「共和主義」を謳歌する内容だけが浮上してくるようだ。

Q8. 〈第九〉歌詞の冒頭3行に秘められた楽曲解釈の鍵とは？

「おお友よ、このような調ではなく/もっと心地よく、喜びに満ちた歌を/共に歌おうではないか」というバス独唱の冒頭3行はシラーの詩ではなく、ベートーヴェン自身の作詞だ。第4楽章開始部で不協和なファンファーレ楽句を「否定」するチェロ＝コントラバスのレチタティーヴォ音型に隠された意味が、バス独唱で明かされるのだ。「このような調ではない！ ^{ニヒト ディーゼー テーネ} nicht diese Töne」は直前の楽句を「否定」する。終楽章に回帰する第1楽章、第2楽章そして第3楽章の各冒頭をことごとく「否定」してたどり着く究極の主題が「歓喜の歌」なのである。

Q9. どうして〈第九〉のアダージョは第3楽章に置かれたの？

これまでの交響曲でベートーヴェンは第2楽章をアダージョの緩徐楽章、第3楽章を第1楽章と同じ主調によるスケルツォとして配置してきた。ところが〈第九〉では配列が逆転しているのだ。どんな意味があるのだろうか？ ベートーヴェンは交響曲第5番「ハ短調」やほとんどの短調ピアノ・ソナタの緩徐楽章である第2楽章で下属短調の平行長調（主調の長3度下の長調）を設定してきた。「二短調」の〈第九〉では緩徐楽章が第3楽章に置かれ、ここで「変口長調」が響くのである。この「変口＝♭シ」の響きこそ、第4楽章開始の強烈な不協和音を導く布石なのだ。ティンパニが「二短調」の属音「ラ」をロール打ちする上方では木管楽器群が一斉に「♭シ」を咆哮する。^{ほうこう}つまり、これは第3楽章と第4楽章を間髪入れずに（第3楽章の終止にある8分休符の後すぐに）続けるという意味である。そのための楽章配列の逆転なのだから、本来はここで4人の独唱者登場とか客席からの拍手などは厳禁なのだ。

（ひらの あきら・音楽評論家）

常任指揮者ヴァイグレが語る 2020年度シーズン



今年4月に第10代常任指揮者に就任したセバスティアン・ヴァイグレ。5月にブルックナー第9番などを振って好スタートを切り、9月にはロットの交響曲などで「読響との確かな手ごたえを感じた」という。2年目となる2020年度シーズンへの思いを聞いた。
〈聞き手・事務局〉

—2020年度のプログラムは、どのような意図で選んだのでしょうか？

1年目は、まずは私の自己紹介のようにドイツ系の作品を多く選びました。2年目の柱となるのは、楽劇〈ワルキューレ〉第1幕など私の得意とするワーグナー作品を集めた演奏会です。ベートーヴェンやブルックナーの作品も振るので、ドイツの古典派とロマン派が基本であるのは変わりないですが、今後は少しずつ他の方面にも広げたいと思っています。21年1月には、ドイツ系でもヒンデミットやハルトマンといった20世紀の作品も取り上げますし、ドヴォルザークやチャイコフスキーといったスラヴ・ロシア系も振ります。

—7月のワーグナー・プログラムの聴きどころは？

私はワーグナーのオペラを、初期の作品も含めて全曲指揮したことのある数少ない指揮者だと思います。ワーグナーは心血を注ぐ存在です。ホルン奏者だった頃から長年取り組む中で、多くの

発見をしてきました。〈ワルキューレ〉第1幕と何を組み合わせようかと考えて、1曲目に選んだのが〈リエントツィ〉序曲。これを最初に演奏することで、ワーグナーの作曲家としての成長ぶりを知っていただけるでしょう。このローマの英雄を描いた物語の後には、バランス的に重くならないように〈ジークフリート牧歌〉を選びました。たった3人の登場人物だけの〈ワルキューレ〉第1幕は、演奏会形式に向いています。今回は3人の素晴らしい歌手が揃いました。ホロウェイさんとは、フランクフルトでシュレーカーの歌劇〈遙かなる響き〉で共演したばかり。ザイフェルトさんは何十年来の親しい友人で、私が日本で働くことを伝えたら、「時間さえ合えば必ず日本に行く」と言ってくださり、今回奇跡的に日程が合い実現しました。シュトルックマンさんも長い友人で、ドイツ語圏のバス・バリトンの中では際立った存在。特に好きなのは、彼の声の色彩感と見事なディクシ^{けう}ョン（発音法）。まるで言葉が残響を持って、宙に漂っているように感じられる稀有な歌手です。演奏会形式には、聴衆が劇の言葉や内容に集中でき、オーケストラの楽器の扱い方もよくわかるという利点があります。歌手たちが交わす視線のわずかな動きがドラマを生みます。読響にとっても、世界的な歌手と共演することは貴重な経験になるでしょう。歌手の呼吸に合わせるなど柔軟性が必要になるので、学ぶことも多いと思います。

—12月《定期》では、ブルックナーの交響曲第6番などを振りますね。

ブルックナーは、今年5月の就任披露演奏会で第9番を振り、楽団員ととても良い関係性が築けたので、次の第6番も楽しみにしています。第6番は今年12月にフランクフルトの私のオーケストラとも演奏しますから、しっかりと準備して臨みたいと思います。

前半にはモーツァルトのピアノ協奏曲第25番を組み合わせました。何度か共演経験のあるキット・アームストロングさんにも期待しています。彼は音楽だけでなく文学、数学など様々なことに興味があり、人生のあらゆることに対してオープンな演奏家。彼と共演するたびに多くの得るものがあります。この曲は木管楽器がソリスティックに活躍する場面があって、室内乐的な要素



リハーサルでの1コマ ©読響

のある協奏曲。キットが魔法を使うように音を醸^{かも}し出す様子を、今から想像できますよ。

—そして、年末恒例の〈第九〉も指揮します。

日本では12月に〈第九〉を演奏する習慣がありますね。本当にベートーヴェンって飽きないんです。私は毎日ベートーヴェンでも構わない(笑)。ドイツにおいて〈第九〉は、ベルリンの壁が崩壊した時のように、みなで喜びを歌い上げる時などに演奏します。この作品はどんな機会に何回演奏されようと揺るぎのない音楽で、歌詞にもあるように、世界を抱擁してくれる曲だと思っています。またこの音楽は、私たちを言語や文化が違って繋いでくれる、素晴らしいものです。今回の声楽ソリストは、二期会〈サロメ〉で共演した日本人二人と、フランクフルト歌劇場の歌手を予定しています。



—1月には、《定期》でヒンデミットの交響曲〈画家マティス〉を振るほか、《名曲シリーズ》や《土曜・日曜マチネーシリーズ》では日本人の若手ソリストとも共演します。

交響曲〈画家マティス〉は、演奏機会は多くないけれど素晴らしい作品。ヒンデミットはフランクフルトで活

動した人なので、私も縁を感じています。彼はフランクフルト時代にほとんどすべての楽器の曲を書いていて、私もホルン・ソナタをよく演奏しました。〈画家マティス〉は、フランスのコルマルにある画家マティアス・グリュネヴァルトが描いた「イーゼンハイム祭壇画」に靈感を得て作曲されたもの。私も実際にこの絵を何度も見たので、この曲にも思い入れがあります。独特の色彩感を持つヒンデミットの音楽言語が魅力的です。ハルトマンの〈葬送協奏曲〉も重要な作品ですね。

若い日本人のソリスト二人、ピアノの藤田真央さんとヴァイオリンの金川^{かながわ}真弓さんと共演するのがとても楽しみです。共にチャイコフスキー国際コンクールで入賞したと聞きました。若い世代との共演はいつでもワクワクしますよ。

鮮烈なシヨスタコーヴィチの響き！

ヴァイグレがフランクフルト歌劇場で
〈ムツェンスク郡のマクベス夫人〉を指揮



カーテンコールの様子

読響常任指揮者ヴァイグレは、2008年からドイツでも屈指のオペラハウスとして名高いフランクフルト歌劇場の音楽総監督を務めています。ここで11月3日に、ヴァイグレの指揮でシヨスタコーヴィチの歌劇〈ムツェンスク郡のマクベス夫人〉(新制作/演出:アンセルム・ウェーバー)のプレミエ(全9回公演の初日)が上演されました。ロシア語も得意とするヴァイグレが初めて手がけるシヨスタコーヴィチの傑作に、大きな注目が寄せられました。

ヴァイグレは、オーケストラ・ピットの同歌劇場管弦楽団から、表情豊かで繊細な音楽を紡ぎ出しました。金管楽器のバンダが増強されることから時に騒々しく響くことも多い作品ですが、ヴァイグレは熱量を保ちながらも、オーケストラと歌手のバランスに気を配り、筋肉質でクリアなサウンドを引き出しました。主役カテリーナをドラマティックに歌ったアニヤ・カンペをはじめ、二人の世界的なロシア人歌手、セルゲイ役のドミトリー・ゴロヴニンとボリス役のドミトリー・ペロセルスキーが力強い歌唱を聞かせ、会場を埋めた約1,400人の満員の聴衆を魅了しました。

カーテンコールでは、主要な歌手と共に、ヴァイグレとオーケストラにも「ブラボー」の喝采が送られました。終演後、ヴァイグレは「私は、ここに自分の新しい扉を開けることができた」と満足そうな表情を浮かべ、「この作品を指揮するのは初めてだったので、過去の習慣にとらわれずに、スコアをまっさらな目で眺めることから始めた。歌手たちは、この作品を何度も歌った経験豊富な方が多かったが、稽古を通して私と新たな解釈を共に探ってくれた」と語り、手ごたえを感じている様子でした。

翌々日のフランクフルター・アルゲマイネ新聞は「ヴァイグレは、作品そのもののシンフォニックな響きと輪郭を失うことなく、歌手を引き立てることに成功した」と評しました。

〈事務局・大久保広晴〉

1月の公演

〈ボレロ〉で新年の幕開け！ ドイツの新鋭グランディが贈る名曲選



1/9 木 第628回 名曲シリーズ
サントリーホール 19:00

指揮＝エリアス・グランディ

ヴァイオリン＝前橋汀子

J.シュトラウスII：喜歌劇〈こうもり〉序曲

サン＝サーンス：序奏とロンド・カプリチオーソ

マスネ：タイスの瞑想曲

サラサーテ：ツィゴイネルワイゼン

モーツァルト：交響曲 第35番〈ハフナー〉

ラヴェル：ボレロ

日下紗矢子ら読響メンバーが繰り広げる白熱のアンサンブル



1/10 金 第24回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール 19:30 (全席完売あり)

《日下紗矢子リーダーによる室内合奏団》

ヴァイオリン＝日下紗矢子(読響特別客演コンサートマスター)

モーツァルト：ディヴェルティメント 第11番

シェーンベルク：浄夜(弦楽合奏版)

下野竜也が現代音楽2作品を日本初演&アダムズでは上野耕平が共演



1/15 水 第594回 定期演奏会
サントリーホール 19:00

指揮＝下野竜也

サクソフォン＝上野耕平

ショスタコーヴィチ：エレジー

ジョン・アダムズ：サクソフォン協奏曲

フェルドマン：On Time and the Instrumental Factor
(日本初演)

グバイドゥーリナ：ペスト流行時の酒宴(日本初演)

お申し込み・お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390 (10時～18時・年中無休) <https://yomikyo.or.jp/>

1月公演の聴きどころ

1/9《名曲》 新年は、ドイツの新鋭指揮者エリアス・グランディによる名曲選で幕を開ける。グランディは2015年のショルティ国際指揮コンクールで第2位(1位なし)となり、2015/16シーズンからハイデルベルク歌劇場の音楽総監督を務めている若手注目株だ。

ソリストには、日本を代表するヴァイオリン界の“レジェンド”前橋汀子を迎えて、〈タイスの瞑想曲〉〈ツィゴイネルワイゼン〉などヴァイオリンの名曲を披露する。60年近いキャリアを誇り、深い知性と精神性、そして人生を凝縮したかのような濃密な音色で円熟味あふれる演奏を聴かせてくれるだろう。フィナーレのラヴェル〈ボレロ〉では、各楽器奏者たちによる妙技、音色を多彩に変化させながら徐々に厚みを増していく音楽の高揚感を味わいたい。

1/15《定期》 2017年3月まで読響の首席客演指揮者を務めた下野竜也が、約3年ぶりに帰ってくる。今回のプログラムは、ロシアとアメリカの二大国の現代作曲家の4作品を並べた、まさに下野の真骨頂と言える意欲的なもの。アメリカの作曲家フェルドマンは、抽象表現主義の絵画のような、平静で時間が止まったような作風が特徴。今回取り上げる日本初演の曲でも、ゆっくりとした時の歩みの中で、静謐な世界が築かれる。

現代ロシアを代表する女性作曲家グバイドゥーリナの〈ペスト流行時の酒宴〉も日本で初演となる。この曲は、プーシキンの同名の戯曲を基にしたもので、ペストによる避けがたい死が迫る極限状態での、酒と恋の狂騒が繰り広げられるかのようだ。また、アダムズの協奏曲では、人気のサクソフォン奏者・上野耕平が共演。難易度が高く、ジャズのテイストも取り入れられているこの曲で、超絶技巧のソロが繰り広げられる。

(文責：事務局)

熱狂のクライマックス! 俊英・山田が振るマーラー〈巨人〉



2/1 土 第224回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

2/2 日 第224回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

2/4 火 第25回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール(大阪) 19:00

指揮=山田和樹(首席客演指揮者)
ヴァイオリン=ネマニャ・ラドゥロヴィチ
マーラー:花の章
ハチャトゥリアン:ヴァイオリン協奏曲
マーラー:交響曲 第1番〈巨人〉

ピアノの鬼才ポゴレリッチが共演するシューマンの傑作協奏曲



2/11 火・祝 第117回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14:00

2/13 木 第629回 名曲シリーズ
サントリーホール 19:00

指揮=山田和樹(首席客演指揮者) ピアノ=イーヴォ・ポゴレリッチ
グリーグ:二つの悲しき旋律
シューマン:ピアノ協奏曲
ドヴォルザーク:交響曲 第7番

指揮者・上岡がピアノを弾き繰り広げる充実の室内楽



2/14 金 第25回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール 19:30 (全席指定あり)

《上岡敏之と読響メンバーの室内楽》
ピアノ=上岡敏之
フォーレ:ピアノ五重奏曲 第2番
ショーン:ピアノ、ヴァイオリンと弦楽四重奏のための協奏曲

欧米で活躍するマイスターのブルックナー2番&名手テツラフのベルク



2/28 金 第595回 定期演奏会
サントリーホール 19:00

指揮=コルネリウス・マイスター(首席客演指揮者)
ヴァイオリン=クリスティアン・テツラフ
ヘフティ:変化(日本初演)
ベルク:ヴァイオリン協奏曲〈ある天使の思い出に〉
ブルックナー:交響曲 第2番

ドイツの名匠ヴァイグレが振る、ロマン派音楽名曲選



3/5 木 第630回 名曲シリーズ
サントリーホール 19:00

3/7 土 第118回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14:00

指揮=セバスティアン・ヴァイグレ(常任指揮者)
ヴァイオリン=アラベラ・美歩・シュタインバッハー
ヴェルディ:歌劇〈運命の力〉序曲
シューマン:ヴァイオリン協奏曲
ブラームス:交響曲 第1番

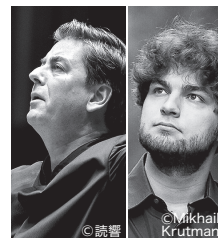
ヴァイグレが得意のR. シュトラウス〈英雄の生涯〉をドラマティックに描く



3/12 木 第596回 定期演奏会
サントリーホール 19:00

指揮=セバスティアン・ヴァイグレ(常任指揮者)
ピアノ=ルーカス・ゲニューシャス
ヒンデミット:主題と変奏〈4つの気質〉
R. シュトラウス:交響詩〈英雄の生涯〉

ロシアの大器ゲニューシャスが弾く華麗なる〈皇帝〉



3/14 土 第225回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

3/15 日 第225回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

指揮=セバスティアン・ヴァイグレ(常任指揮者)
ピアノ=ルーカス・ゲニューシャス
ベートーヴェン:ピアノ協奏曲 第5番〈皇帝〉
R. シュトラウス:交響詩〈英雄の生涯〉

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

インターネットで24時間いつでもお申し込みができ、ご自身で好みの座席をお選びいただけます。上記URLもしくはホームページのトップページ【読響チケットWEB】のボタンから、ぜひご利用ください。

※初回お申し込み時は利用登録(無料)が必要です。

■ウェスタ川越 読響ニューイヤー・コンサート

1/5 14:00
日 ウェスタ川越 大ホール

指揮=原田慶太楼
ヴァイオリン=前橋汀子

J. シュトラウスII: 喜歌劇〈こもり〉序曲
メンデルスゾーン: ヴァイオリン協奏曲
ドヴォルザーク: 交響曲 第9番〈新世界から〉

[料金] S¥5,000 A¥4,000 (ウェスタ川越 WEB メンバーズ割引あり westa-kawagoe.jp)
[お問い合わせ] 読響チケットセンター 0570-00-4390 (10~18時)

■都民芸術フェスティバル

1/27 19:00
月 東京芸術劇場コンサートホール

指揮=横山 奏
ピアノ=横山幸雄

ベートーヴェン: ピアノ協奏曲 第5番〈皇帝〉
ベートーヴェン: 交響曲 第5番〈運命〉

[料金] 一般: A¥4,000 B¥3,000 C¥2,000
学生: A¥3,000 B¥2,000 C¥1,000

[お問い合わせ] 日本演奏連盟事務局 03-3539-5131 (平日10~18時)

■東京芸術劇場シアターオペラ vol.13

2/22 14:00
土 東京芸術劇場コンサートホール

指揮=ヘンリック・シェーファー

演出・振付=矢内原美邦

出演=エヴァ・メイ、醍醐園佳、森山京子、宮里直樹、三浦克次、古橋郷平、
三戸大久、高橋洋介、ジョン・ハオ、三浦大喜、杉尾真吾、井手壮志朗 ほか

合唱=新国立劇場合唱団

ヴェルディ: 歌劇〈椿姫〉全幕 (日本語字幕付原語上演)

[料金] SS¥12,000 S¥10,000 A¥8,000 B¥6,000 C¥4,000
D¥3,000 E¥1,500 高校生以下 ¥1,000

[お問い合わせ] 東京芸術劇場ボックスオフィス 0570-010-296 (10~19時/休館日を除く)

2020-21シーズンの聴きどころ②

古今の傑作でオーケストラの醍醐味を味わう《名曲シリーズ》と、週末の午後を東京芸術劇場でゆったりと過ごす《土曜・日曜マチネーシリーズ》。常任指揮者セバスティアン・ヴァイグレを中心に、近年の音楽界をにぎわすライジングスターから、経験豊かなベテランまで、多彩な顔ぶれがそろった。〈飯尾洋一 音楽ライター〉

名曲シリーズ

Popular Series

新シーズン開幕となる4月は特別客演指揮者の小林研一郎が登場。生誕250年を迎えるベートーヴェンの傑作が並ぶ。三重協奏曲では、ヴァイオリンの成田達輝、ピアノの小林亜矢乃、読響ソロ・チェロの遠藤真理がソリストを務め、開幕に花を添える。交響曲第7番では“炎のマエストロ”がオーケストラに火をつける。

5月の指揮者はイギリスのベン・グラスバーク。2017年ブザンソン指揮者コンクールの優勝者で、グラインドボーン音楽祭ツアーの首席指揮者に任命されるなど、早くも頭角をあらわしつつある新鋭だ。シベリウスの交響曲第2番で才腕を振るう。ベートーヴェンのピアノ協奏曲第1番では大ベテラン、ペーター・レーゼールと共演する。

6月は桂冠指揮者シルヴァン・カンブルランが帰ってくる。ムソルグスキー (ラヴェル編) の組曲〈展覧会の絵〉、メシアンの〈キリストの昇天〉で、色彩感に富んだオーケストレーションを堪能したい。コルンゴルトのヴァイオリン協奏曲では若き名手、三浦文彰がソロを務める。

7月は常任指揮者セバスティアン・ヴァイグレによる本領発揮のワーグナー・プログラム。楽劇〈ワルキューレ〉第1幕 (演奏会形式) では、ペーター・ザイフェルトをはじめ、ジェニファー・ホロウェイ、ファルク・シュトルックマンの豪華歌手陣がそろった。

9月はウズベキスタン出身の若武者アジス・ショハキモ



小林研一郎
指揮者



小林亜矢乃
Violinist



ベン・グラスバーク
Conductor



ペーター・レーゼール
Conductor



シルヴァン・カンブルラン
Conductor



三浦文彰
Violinist



セバスティアン・ヴァイグレ
指揮者

Saturday & Sunday Matinée Series

土日マチネーシリーズ

4月公演で先陣を切るのは、特別客演指揮者の“炎のマエストロ”こと**小林研一郎**。得意のベートーヴェンから、交響曲第3番〈英雄〉を披露する。サン＝サーンスのヴァイオリン協奏曲第3番では、2018年ハノーファー国際ヴァイオリン・コンクールで入賞した**福田廉之介**が共演する。

5月はイギリス出身の気鋭**ベン・グラスバーク**が客演する。モーツァルトの交響曲第31番〈パリ〉、ラヴェルの〈ボレロ〉など、プログラムは多彩。ハープの貴公子**グザヴィエ・ドゥ・メストレ**は、ボワエルデュのハープ協奏曲で優雅なひとときへ誘う。

6月は桂冠指揮者**シルヴァン・カンブルラン**との再会が待っている。プロコフィエフの〈ロミオとジュリエット〉抜粋、ラヴェルの〈ダフニスとクロエ〉第2組曲という20世紀のバレエ音楽で鮮烈なサウンドを響かせる。チャイコフスキーのピアノ協奏曲第1番では、2014年フランク・リスト国際コンクールの優勝者、ジョージア出身の**マリyam・バタシヴィリ**がソロを務める。

7月はドイツの**アニヤ・ビールマイアー**が登場する。2021年よりハーグ・レジデンティ管弦楽団の首席指揮者に就任する躍進中の女性指揮者だ。女性初のローマ賞受賞作曲家であるリリ・ブーランジェの〈春の朝に〉、チャイコフスキーの交響曲第5番他を指揮する。人気の**反田恭平**が弾くチャイコフスキーのピアノ協奏曲第2番も話題を呼ぶ。第2番を聴ける貴重なチャンス。

9月は新たに読響の指揮者／クリエイティブ・パートナーに就任した**鈴木優人**によるベートーヴェン・プログラム。バッハ・コレギウム・ジャパンでも活躍する鈴木優人が、どんな交響曲第6番〈田園〉を聴かせてくれるのか、大いに期待したい。ヴァイオリン協奏曲では、オランダで注目を浴びる



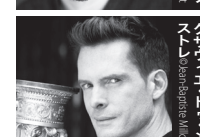
小林研一郎
指揮者



福田廉之介
ヴァイオリニスト



ベン・グラスバーク
指揮者



グザヴィエ・ドゥ・メストレ
ハープ奏者



シルヴァン・カンブルラン
指揮者



マリyam・バタシヴィリ
ピアニスト



アニヤ・ビールマイアー
指揮者



反田恭平
ピアニスト



鈴木優人
指揮者

フが、2018年に続いて読響の指揮台にのぼる。リムスキー＝コルサコフの交響組曲〈シェエラザード〉他で、熱風を吹き込む。カバレフスキーのチェロ協奏曲第1番では、**宮田大**の雄弁なソロが聴きもの。

11月はアルゼンチン出身の**アレホ・ペレス**が客演する。ペレスはすでにザルツブルク音楽祭でウィーン・フィルを指揮した経験もある俊英。ベルリオズの〈幻想交響曲〉で躍動感あふれるドラマを描き出してくれることだろう。ギターの**村治佳織**が共演するのはロドリゴの〈ある貴紳のための幻想曲〉。〈アランフェス〉と双璧をなすギター協奏曲の名作だ。

12月といえばベートーヴェンの〈第九〉。記念すべきベートーヴェン・イヤーの〈第九〉となれば、常任指揮者**ヴァイグレ**の出番だ。ソプラノの**森谷真理**、メゾ・ソプラノの**ターニャ・アリアーネ・バウムガルトナー**、バリトンの**大沼徹**、**新国立劇場合唱団**ら万全の声楽陣とともに、偉大な傑作の核心に迫る。

2021年1月は**ヴァイグレ**によるロシア音楽プログラムが組まれた。チャイコフスキーの交響曲第4番で熱狂をもたらす。ラフマニノフのピアノ協奏曲第3番では、チャイコフスキー国際コンクールでの第2位獲得が記憶に新しい**藤田真央**がソロを務める。

2月はイギリスの新星**ケレム・ハサン**が初登場。2018年にロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団でハイティンクの代役を務めて一躍注目を浴びた若者が、ブラームスの交響曲第2番他を振る。チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲では、チャイコフスキー国際コンクール第2位の**マルク・ブシュコフ**が共演。

3月は首席客演指揮者の**山田和樹**が指揮。リストの〈前奏曲〉、R. シュトラウスの〈死と変容〉、ニールセンの〈不滅〉という、魂の浄化を題材としたプログラムが興味深い。





若手ロザンネ・フィリップスが独奏を務める。

10月は鬼才フランソワ＝グザヴィエ・ロトがストラヴィンスキーの〈春の祭典〉を指揮する。自ら設立したピリオド楽器オーケストラ「レ・シエクル」での同曲の演奏が話題を呼んだロトだが、果たして読響とはどんなアプローチで臨むのか。ラフマニノフの〈パガニーニの主題による狂詩曲〉では、今や日本を代表する実力者となった河村尚子がソロを担う。

11月はベテラン、井上道義が招かれる。メインプログラムはマエストロが近年力を入れるブルックナー。フェスタサマーミュージザKAWASAKIでの第8番に続いて、交響曲第7番が演奏される。ドイツの名手、ユリアン・シュテッケルがハイドンのチェロ協奏曲第1番で共演するのも楽しみ。

12月はベートーヴェンの〈第九〉。この曲を聴かずして年は越せない。常任指揮者ヴァイグレと、ソプラノの森谷真理、メゾ・ソプラノのターニャ＝アリアーネ・パウムガルトナー、バリトンの大沼徹、新国立劇場合唱団らが満を持して、ベートーヴェン・イヤーの〈第九〉に臨む。

2021年1月もヴァイグレが指揮。新年はドヴォルザークの交響曲第9番〈新世界から〉で気持ちを新たにしたい。ブルッフのヴァイオリン協奏曲第1番の独奏は、先頃チャイコフスキー国際コンクールで入賞した金川真弓。

3月は首席客演指揮者の山田和樹による、北中南米とローマへの音楽の旅。コープランド〈エル・サロン・メヒコ〉、ガーシュインのピアノ協奏曲、ヴィラ＝ロボスのブラジル風バッサ第9番、レスピーギの交響詩〈ローマの松〉という華やかなプログラムだ。ガーシュインではキューバ出身の隠れた巨匠、ホルヘ・ルイス・ブラッツがヴェールを脱ぐ。